

---

# 闇と光を裁く者

FORNEUS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇と光を裁く者

### 【コード】

N1000U

### 【作者名】

FORNEUS

### 【あらすじ】

天使、墮天使、悪魔の三竦みのどれにも属さず闘う者、汐留辰哉  
シオドメトキヤ。

彼は、生き残ることは出来るのであろうか？

## 第壹章 prologue

・とある廃墟にて

「貴様を消滅させてくれるわ!!」

「ちっ!これでも喰らえよ!!」

辰哉 トキヤ は炎を放つ。が、片手で防がれてしまう。

「舐めるな!我はルシファー様の眷属だぞ!身の程を弁える人間風情が!!」

旧魔王派であるらしいその上級悪魔は辰哉に向かって膨大な量の魔力のオーラを撃ち出す。

『Defend』

突然、辰哉の羽織っていたマントから音が響き、上級悪魔の攻撃を防いだ。

「何ッ神器 セイクリッド・ギア だと!!」

上級悪魔は驚愕する。

『Charge』

「これで終わりにする!!」

『 Reflect! 』

再びマントから音が聞こえ先ほどのオーラの数倍のエネルギーが、辰哉の右腕から撃ち出され、上級悪魔に命中し上級悪魔は消滅した。

## キャラ紹介其の壱

シオドメトキヤ  
汐留辰哉

多分、人間。

外見は中性的かつ整っている方で黒髪。身長はやや低め。性格はやや腹黒かったりする。

魔術師だが、基本的な魔術は超下手で、牽制にしかない。最悪瞬時に消される程。

闘うときは、自身の血を操る魔術を使うか神器に頼り気味。剣の技術はそこそこ。

『裁きの外套』《ジャツジメント・ニスデール》

フード付の長いマントの形をした神器。

辰哉はフードを被っていない。

能力は相手の攻撃を防いだ上で吸収し、

自分の魔力を上乗せして跳ね返すというもの。

但し、打撃攻撃は防げない。

又、何枚か別に創ることもできる。

ロシギヌス  
神器ではないが、この神器は

1つしか存在しない。

## 第壹章 巻話

Side 辰哉

俺の名前は汐留辰哉だ。名前が変？それは言わないでくれ、結構気にしてるんだ！まあ、結構ノリで決まったからしゃあないが……。

「何をぶつぶつ言ってるんだ？」

こいつは片桐葉月。ハーフヴァンパイアだ。

「おい、話聞いてんのかぁ!？」

コイツも神器の所有者だ。コイツの神器は中々便利だが、どんな攻撃をしてもかなりエグいモノになる。

「何だよ？今、読者に説明してるんだろぅが、阿呆！」

「読者？何の話をしてんだ??？」

「んで、要件は何だ？」

こいつはボケてる去何処までも突っ込んでくる奴だから此処等で話を聞くことにしようか……。

「ああ、最近此処等で旧魔王派の悪魔供が暴れてるらしいんだよ。被害は甚大で、ここら周囲の集落とかは根刮ぎ潰されている。お前は何か知らねえかあ？」

「ああ、この前旧魔王のルシファアの眷属を名乗る上級悪魔と戦闘した。一応、滅ぼしたが、ソイツのことか？単独犯ではないと思うんだが……」

俺はこの前の戦闘を思いだし言った。ありゃあ、そこそこ強かったなあ……。神器が無かったら死んでいたかも知れない。

「やはりか……。俺の聞いた話でも複数の悪魔がいたらしいから、ソイツは多分その中の1人だろうなあ……。つと、奴さん等のお出座しだあ」

「どうやら、その様だな。数も結構多いな……」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

俺らが会話をしている途中で、何者かによって爆音とともに基地のシエルターが破壊された。多分攻撃を仕掛けて来たのは、さっき話していた旧魔王派の悪共魔なんだろうな……。

ハア、面倒くせえ……………

「下等な人間供にに告ぐ。我ら真なる魔王様な意思を継ぐ我らが、貴様等を滅ぼしてくれる。そして……、我が同胞アンセントの仇を執らせて戴く！」

外には中級悪魔以上の悪魔が数十体配備されていた。つゝかアンセントって誰だ？

「だとよお、トキヤ？」

「薙ぎ払うぞハツキ」

俺とハツキは神器を出現させる。

「トキヤ、牽制を頼む！」

「了解だ。ハアツ！」

俺は炎の魔術を放つ。

まあ、俺には普通の魔術の才能は無いに等しい。撃ったとしても、一瞬で消されるだろうが……

「この程度の魔術など消し去ってくれるわ！」

「甘えなあ？絞め殺してやるよ!!！」

ハヅキは炎を消そうとする悪魔達に狙いを定め、『罪悪の鎖』の能力で鎖を放ち数体の悪魔を絞めつけていく……………とまあ、こつこつという風に牽制にはなる。さて、次は俺の番だな？

「『血よ我矛と成れ!』」

B e c o m e m y b l o o d o f p i k e .

俺は自分の手に持っていた短刀を突き刺す。流れる血は詠唱によっ

て操られていく。操られた血は、ナイフ程度の大きさの剣になって鎖に縛られた悪魔達に、降り注ぐ。結構、痛てえんだよなあ……………。

降り注いだ血の剣は、数体の悪魔に突き刺さり消し去る。何体かの悪魔が消滅すると、宣戦布告をしてきた指導者らしい上級悪魔は……………

「ッ！？たかが人間ごときが我等悪魔に齒向かうなど生意気な！」

そう言っつて、持っている魔剣で斬りかかってくる。

アレは、名の知れた魔剣じゃないな？なら打ち合う程度はできるだろう。

「ハツキ、手出しすんなよ？こいつは俺の獲物だ！『血よ我が剣と成れ！』」

B e c o m e   m y   b l o o d   o f   s w o r d .

俺が詠唱を終えると、その手には血で創られた剣があった。魔力を纏わせると、その刀身は深紅に染まった。

大分、血を流してるなあ……………倒れねえといいんだが。

「舐めるなよ？悪魔が！」

俺はそう言って、悪魔に剣を向ける。

ギンツ！バキン！と火花を散らしながら剣と剣がぶつかり合う。  
埒があかねえ……。

この小競り合いに業を煮やした上級悪魔の男は、

「貴様、人間にしては中々やるではないか？しかし、所詮は無駄な足掻きよ！」

そう言いながら俺との間に距離をおいて、魔剣の衝撃波と自らの放つ魔力弾で攻撃を行ってくる。

……掛かったな！

『Defend Charge』

俺のマント型の神器がその衝撃波と魔力弾を吸収して、俺の持つ血で削られた剣にそれを宿らせる。

「貴様も神器所持者か！？忌々しい神めが……！」

俺の持つ剣から禍々しいオーラが放たれ、空気が振動する。

「悪いが死んで貰うぜ？」

俺はその剣を振り下す。

……ん？手応えがないだど！？絶対に奴は反応できなかった筈だ……！

ガキン！

俺の振り下ろした剣は先程迄闘っていた上級悪魔の男とは違う悪魔に防がれていた……。

「やっと来たかアクレシーエ。今まで何処にいたのだ？」

バシユッ！

突然、上級悪魔の男がアクレーシエと呼んでいた悪魔に切り捨てられた……。

……おいおい、仲間だったんじゃないかねえのか？敵が減るのは大歓迎なんだが……。

「ガハアツ！？何を…するのだ…？アクレーシエ？」

アクレーシエの行動が予想外だったようで、何が何なのか分からないという顔をしている。

「全く、あれだけ勝手な行動は慎めと言ったじゃ有りませんか……。ですから、貴方に上層部の方から討伐命令が出ていますね。ああ、何も言わなくて結構ですよ？貴方はもう消滅するのですから……。」

その話を聞き、上級悪魔の男は、

「アクレーエエエシエエッ………！！！」

そう断末魔を上げて消滅した……。

それを見届けると奴は、

「フム、中々面白い能力をお持ちしているようですねえ？まあ、危険因子の種は、早急に摘んでおくのが一番でしょう……」

そう言い終わると、奴は俺に襲い掛かってきた。

S i d e O u t

## 第壹章 武話

Side 辰哉

「クッ！」

アクレシーエの斬撃を往なそうとするが、往なしきれず徐々にダメージを喰らう。

コイツ、相当の手練れだ……。この前戦った奴以上の……。

「そろそろ死んで頂きましょうか？」

奴の背部を光が包む。すると鈍く輝く翼が展開する。  
ありゃあ、白龍皇の神器か？

「これは『龍の翼』。言うならば『白龍皇の光翼』の下位神器ですかね？……では失いなさい！」

『Dividd!』

奴の神器から発せられる音声と共に、俺の血の剣から発せられる魔力のオーラが縮小される。

……コイツはヤベエ。もし、『白龍皇の光翼』と同じ効果なら、今で剣のオーラは半減された。

「お前、何故神器が使える!？」

悪魔じゃ使えない筈だ!

「神器は、貴方人間だけのモノでは無いのですよ? まあ、私は混血ですから何ら問題無く使えます。それに、所有者から奪い取れば人間でなくとも使えますし。まあ、その所有者は死にますがね?」

奴の言う通り、本来神器は人間にしか宿らない。例外として奴や葉月のように、人間と他種族との混血ならば宿す事はできる。ただ、奴は他の神器所有者から神器を奪ってもいるようだ。因みに、神器を奪われた所有者は死ぬ事が多い。

「『血よ我が籠手と成れ!』喰らえっ!」

B e c o m e m y b l o o d o f b r a c e r .

俺は血の剣を消滅させ、血でできた籠手を創り出して殴り掛かる。

「その程度の攻撃！」

奴は防御障壁を発生させる。が、バリントツ！と音が鳴り割れて、奴に直撃をする。

……物理的な攻撃に防御障壁は余り効果をなさねえよ！

「ッ！この障壁を一撃で破るとは……、予想外ですねえ？血を使う魔術など存在しない筈ですが……？少々遊び過ぎましたかね？まあ、これで終わりですから関係有りませんね？」

バタツ！

俺は倒れた。どうやら、血を使い過ぎたらしく身体に力が入らない。奴は手に魔力を収束させている

ゲホツ！

血が足りねえのに吐血しちまった……。ああ、意識が遠退いて行きやがる……。

Side Out

S i d e 葉月

バタッ！

トキヤは地に倒れ伏した。アクレーシエと名乗る悪魔が魔力を手に収束させている。大方、あの攻撃でトキヤを殺るつもりだろうなあ……。

「おせねえよ！」

俺は鎖を奴に放ち魔力の収束を中断させる。

「クツ…時間切れですか。ではここらでおいとま致しましょうか？」

奴は目の前に転送用魔方陣を展開しこの場から去って行った。

時間切れ？何の事だろうか…？まあ、良い。そんな事よりトキヤだなあ……。

「おい、大丈夫かトキヤ？……出血多量か。だから無理すんなって言ったのによお………」

俺はトキヤを抱えて廃墟と成った基地を後にした。

S i d e O u t

S i d e アクレーシエ

フム、血を操る魔術……。一体何なのでしょうか？まさか、あの存在しない神威具の一つなのですかねえ？彼の名は確か汐留辰哉と言いましたか？再び会い見たいですねえ……。

「アクレーシエ、例の件だが……」

「分かっていますよ。」

どうやら、近い内に会うことになりそうですねえ？

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

## 第壹章 参話

Side 辰哉

ゲホツ、ゲホツ！ん？ここは何処だ？

「おお、起きたかトキヤ。お前2日間も眠ってたんだぜ？だから言つたろう？無理すんなって。」

「ああ、すまない。そういえばあの悪魔どうなった？」

確か俺はあいつと闘ってて出血多量でブツ倒れたんだよな……。

「あいつは時間切れだの何だの言って、脱出したぞ？全く、基地直してけってんだよ……。」

そついや、基地ブツ壊れてたよな。

……………ん？

「じゃあ、ここ何処？」

「ここは俺ん所の一族の奴等がやっている病院だ。普通の人間はいねえから安心しろ」

安心しろってお前、俺は血を操ったりする程度の普通の人間だぞ？

……………今思い返して見たら明らかに人外だった。

「基地の奴等はどくなったんだ？」

記憶によると死体の山ができてたが。

「ん？良く調べてねえからなあ……………。分からんが、多分全滅したんだろっ」

まあ、そんなに関わりねえしどうでもいいや、半分雇われる形で居たわけだし。

「それより、お前はもう動けるか？」

「歩く程度には支障ねえな」

「そいつは良かった！いやあ実はな…今ここ襲撃受けてんだよなあ  
堕天使に。」

おい！さっき安心しろとか言ってたじゃん！全然安心できねえよ！？

「安心しろとは言ったが、安全とは言っていないぞ？そんな事より、  
お前剣使えたよな？貸すから退治を手伝えや」

思考読んで来やがった。つーか、こいつは鬼か？俺は病み上がりどころか、今起きたばかりなんだぞ！

「つゝ訳で行くぞトキヤ」

「じゃねえよ！フザケンじゃねえ〜！！」

俺の叫びが、堕天使に襲撃されているらしい吸血鬼の病院で木霊した。

「墮天使かよ……………厄介だなあ」

「ああ、確かサマエル辺りがいたらしい」

「おいおい、幹部がお出でなさったよ…しかもそいつの光は死を司ってるらしいからなあ、刺されたりしたら相当ヤベエなあ……………」。

「着いたぞ。っと！危ねえ、矢が飛んできやがった」

「ハヅキは、どこからか突然飛んできた光の矢を鎖で防ぐ。」

「俺は外にいる奴らを駆逐してくる。内は頼んだ！」

ハヅキはそう言うと、無数の蝙蝠の様になり、外へ飛びさった。

「やっぱり血は使えねえな……。まあ、だからと言って易々と死ぬ訳にもいかないが！」

俺は 手始めに下級墮天使数体を相手どり、借り物の剣で斬りかかった。

「大方片付いたかな？」

俺は最後の一体であろう墮天使を斬り伏せて眩く。

……だが明らかにコイツらは弱すぎる。本隊は外部にいるのかもしれないなあ。更に、ここらで感じるオーラの大半が消えていない。その上、サマエルも見当たらない。

バサツバサツ！

翼を羽ばたかせる音が聞こえてくる。周りを見渡すと墮天使のモノではない死体の山が築かれていた。

「いやあ、全く手応えがない」

空から黒き翼を持つ天使が降りてくる。こいつから発せられるオーラはさつきまで戦っていた雑魚共とは違う……。間違いない、こいつがサマエルだ！

「お前はまだ死んでいないんだな？フハハ！面白い、アザゼルから持たせられたこの神器で遊んでやろう」

奴の周囲にあるモノの影が動き出す。

「影よ！」

奴はそう唱えると虚空に光の槍を創り出し、それを影が包み込む。

この神器は確か、『闇夜の大盾』と云うらしい。この状態ではどちらかと言えば矛だな。

「俺はこれを『闇夜の大矛』と呼んでいる。死を司る堕ちた天使であるこの俺サマエルに相応しい能力だとは思はぬか？」

奴は不敵に笑んでこちらに向かってくる。

ヤベエな、アレが刺さったら死ぬだろうな…確実に。

多少なら血を使うことはできるだろうか？いや、使わざるを得ないな…。

俺は軽く指先を切りつけて剣に滴らせる。悪いな、ハツキ剣が耐えられないかも知れない…。

「『血よ、剣に宿れ！』」

C l u d e   i n   m y   b l o o d   o f   s w o r d .

俺の持つ剣の刀身が淡い赤に鈍く光った……………。

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

## 第7章四話（前書き）

サブタイの表記変えました

## 第壹章四話

Side 葉月

トキヤは……………まあ、大丈夫だろう。アイツのことだから死なないだろうからな。何せアイツはそこらの悪魔よりも丈夫だ、もしかしたらアイツは人間じゃないのでは……………？

「人の邪魔すんじゃないよ、喰らいな！」

ザシュツ！ザシュツ！

俺が鎖を数本放つと周囲にいた墮天使が数体一気に倒され、その亡骸は完全に消滅した。

「オメエは誰だ？」

俺は周囲を見渡しながら叫問いかける。……………この気配はこの前の悪魔だな。

「おやおや、貴方は汐留辰哉と一緒にいた鎖遣いではないですか？」

彼はいないのですか？」

確かコイツは、アクレ州だったっけなあ？

「…私はそんなブラジルの地名みたいな名前ではありませんよ？アクレーシエです。アクレーシエ」

ありゃ？心を読んで来やがった……………。

「んで、何でオメエがここにいるんだ？」

「目的ですか？そうですね……………。悪魔が堕天使を潰すのに理由が要るのでしょうか？」

コイツ、絶対に何か企んでるな……………。  
今変な間があつたし……………。

「そんなことより、互いに堕天使が邪魔なのですから組みませんか？」

信用でき…ねえよなあ……………。ハア、仕方ねえなあ、戦力的には有り難いしな。

「………………。分かった、協力しよう」

「今の間が何なのか些か問い詰めたいものですが？まあ、良いですよっ…………」

バサッバサッ！

堕天使が又数体現れた。コッチが本隊だったのか？

「仕方がないですねえ、出でよブリューナク！」

何で悪魔の癖してフハハ…じゃなかった、太陽神の槍を持ってんだよ……………

ブリューナクの5つの切っ先から稲妻が放たれる。こっちも負けてはいられんな。

ドスッ！ドスッ！

俺は幾つもの鎖を創りだして墮天使達の羽や胴体を貫いていく。

ある程度片がついただろうと思っていると、

バサッ！バサッ！

トキヤのいる病院内部の方に強大な力を持つ墮天使が降り立った。

S i d e O u t

S i d e 辰哉

俺の血を帯びた剣が禍々しいオーラを放っている。どつちら、剣は耐えているようだ。

俺はサマエルを斬りつける。

ギイン！ガキンツ！

剣と矛がぶつかり合う。しかし、奴の矛は影に包まれており血によって付加した力が相殺される。

奴は俺の周囲に有るものの影を操り俺の脚を拘束する。

「これで避けられまい！」

ザッ！ドドドドドッ！

奴は矛を投げ捨てて、魔方陣を召喚する。そこから大量の光の矢が降り注いだ。こいつはヤベエな、だが！こんな所で死にたかあねえんだよ！！

『Next Develop of Judgment!!』

『DefendDefendDefendDefendDefendDefendDefendDefend!』

俺の神器がフードの付いたマントから刺繍の施されたコートの姿になり、サマエルの攻撃をほぼ完全に消し去る。

……だが、俺自体がもう持たねえ。  
まあ、病み上がりには頑張ったな。

「ほう、アレを防ぐか…面白い！止めをさしてやる！と言いたい所なのだが俺も多忙なのでね。ここらで退散させていただこう」

サマエルは転送用魔方陣で冥界へと去っていった。

ハハツ……また、意識が遠退いてくよ。まあ、死にはしねえだろうなあ……

Side Out

## 第壹章伍話（前書き）

色々遭って更新できませんでした。漢字？間違っていないですよ？

## 第壹章 伍話

Side 辰哉

先程の戦闘の30分後

…………… どうやら生きてるみてえだな。  
それはそれとして、俺の神器が変化した……………？神器は想いに応える  
というが……………。俺が死にたくないと思ったからなのだろうか？

「おい、トキヤ！生きてるか？」

あ、ハヅキだ。外の奴等は全滅したのか？つて、なんか居るし！え  
つとア・ア・アク…悪霊？シエー？

「…あなた方はどうして人の名前を覚えないのでしょうか？生きて  
ますし、赤塚さん関係有りませんよ……………？」

あ、思い出した。アクレーシエだった。つゝかお前は悪魔だろ！

「ところで何故お前がここにいるんだ？」

「……………。私は嫌われているのでしょうか？」

そりゃそうだろ！何たって敵だし！！

「それはそれとして私の目的はといいますと、オフィスについて  
なのですが…」

オフィス…？

自分の中で何かが鼓動する。自分ですら分からない何かが…。

悲鳴が聞こえる。家々は焼かれ、そこは火の海と化している。

腰まである黒髪の小柄な少女。少女の目は血を流している青年へと向けられている。

「我が居るからなのか？ならば、我がいなければ良かったのだろうか？」

彼女は感情の乏しい表情ではあるがその顔は悲しみに染まっている…。

「オフィス、そんなことはない！…グッ！少なくとも俺は違う！」

青年は苦しそうに呻きながら言う。

「我が力を与える。だから…死なないでくれ！」

そう言って彼女は青年の手を取り 無限の龍神 と呼ばれる所以である無限の力を流し込む。

しかし、

「君の力を持ってしてでもこの身体はもたないだろう……」

青年は血で魔方陣を描く。

「オーフィス、暫くはお別れだ。…ゲホツ！これは転生の術式だ……」

彼は今にも消えそうな声でそう続けた。

「その術式は失敗の可能性の方が高い！」

彼女は頬に涙を伝わせながら言う。

「俺はテウルギスト 降霊者 だ……。きっと大丈夫、そんな悲しい顔はしないでくれ……」

術式が発動し紅い光が青年を包み込む。

「どつやら時間切れのようだ……。また逢おうオフィス……  
……」

青年の身体が術式の放つ光に呑み込まれていった。

この記憶は何だ？俺の記憶ではない！しかし倒れていた奴は間違いなく俺だ……。一体どういふことなんだろうか？

「聞いていますか？汐留辰哉？」

「……………？ああ、すまん。ちょっと考え事をしていた……………」

「???では、途中から話しますよ？オフィスはとあるテウルギストの転生体を探しているらしいのですよ……………」

……………！？

さっきの記憶とほぼ一致しているだと？

「そして、貴方にはそのテウルギストと共通点が多々有りまして……………」

「例えば血を操る所や、その外見がな！」

この場にさっきまでいなかった男が俺に向けていう。コイツは誰だ？見たことは有るんだが……………。

「俺はアザゼル。墮天使どもの頭をやっている。宜しくな、汐留辰哉いや、断罪者」

その男 アザゼルは十二枚の漆黒の翼を展開する。

断罪者か……………。

「おやおや、これは 閃光と暗黒の龍絶剣 総督じゃあないですか？」

アクレーシエが嫌み8割冗談2割でいう。つーか滅茶苦茶ニヤニヤしてるし…。

「うつせえ！んなことさつさと忘れる！！……………とそんな言い争いをしに来たんじゃなかった。サマエルの事なんだが……………」

どうやらアザゼルが言うには、前々から余り協力的な関係は築けて

いなかったのだが、最近サマエルが何かを企んでいるらしい。それも、かなり大規模な……。だからそれが何かを突き止めて、最悪消して欲しいとの事だった。

報酬として、俺自身の事やオフィスについての知り得る事を全て話すと言っていた。

「私もサマエルの討伐を手伝いましょう。ハハハ、面白そうですねえ？」

「ん？お前はアクレーシエ・アラストルじゃないか？どうしてそんな奴がここにいるんだ？」

「私が何をしようとも、私の勝手ですから。邪魔立てをするなら滅ぼしますよ？」

アクレーシエは槍……ブリーナクをアザゼルに向ける。

「いや、ここで殺り合う気はない。そんなじゃ、後は頼んだ！」

アザゼルはそう言い残し去って行った。

「ハア、面倒くさい。ん？待てよ！サマエルって何処にいったよ！

「！」

他の2人は無言になり溜め息をつき、トキヤの叫びが響き渡った。

Side Out

Sideアザゼル

あ！サマエルの居場所言ってなかった……。  
後でシエムハザに頼んでおこう。

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

## 第壹章閑話巻

Side 辰哉

「おい、コイツら目がヤバイんだが!？」

これはゾンビですか?いいえ動死体です。

てな訳で絶賛逃亡中だ……。何故追われているか?それは五時間前に遡る……。

5時間前

取り敢えずアザゼルから連絡があるまで、俺達はそこら辺を散策する事にした。

「なあ、ハツキ……」

「どうした？」

「腹減った！」

だってお前！俺は何だかんだで2日間も飯喰らってないんだぞ！？

「フツ、情けないですね汐留辰哉……………」

ギュルル〜

アクレーシエの腹が鳴る。

っーかお前もかよ……………。

「いや、これはアレです。ホラ……………」

顔を真っ赤にして、何か言い訳しだしたよ……………。

「まあ、腹が減ったんならしゃーねえなあ。んじゃあ、行ってこい  
！」

ハツキがミノタウロスの大群を指差して言った。

「どっしろと言っつのですか？」

アクレーシェが聞くと……………

「決まってるだろうっ？狩りだよ狩り！」

アレ？何かコイツらこっちに向かって来やがったんだが！？

ギヤオオオオー！！

しょうがない……。俺の飯になって貰おうか！

「血よ、劔に宿れ！」

俺の持つ劔の刀身が淡い赤に鈍く光る。

「喰らいな！」

俺は劔から衝撃波を放つ！

衝撃波に当たったミノタウロスは消えて無くなった…。

「NO～！俺の飯があっ……………！？」

「何やっているのですか！？悪いですが、食糧になって貰いまよ！」

「出でよ、ブリューナク！」

アクレーシエはフハハry)を取り出しミノタウロスに波動を放つ。

「消えない程度に死に絶えなさい！」

と、いうやり取りをして今はミノタウロスを串刺しにして焼いている所なんだが……………。

「貴方のせいでミノタウロスが一頭しか取れなかったじゃないですか!？」

「お前も消してたじゃんか!それに捕獲したのハツキだし!」

そう、俺達の攻撃は威力が高過ぎるからミノタウロスが耐えきれずに消滅してしまった。だから、ここにあるのはハツキが鎖で捕獲した一頭だけなんだよ……………。

つかブリューナク使ったら神でも消えるだろ……………。

「そら、さっさと食って寝床探すぞ!」

てな訳で焼きミノタウロスを2分で喰い終わった俺達は寝床を探している

「何だアレ?」

目の前に不気味な雰囲気醸し出し過ぎて逆に興味を惹く建物を見つけた。

「取り敢えず入るぞ!」

ってな訳で、中に入ってみると放棄された病院だった事が分かった。

ガタガタガタッ！

「今何か鳴らなかつたか？」

「気のせいでしょう？」

タスケテ…

「絶対何かいるって！」

うわぁ…ここ嫌だわ。

「取り敢えずこの部屋に入る…！？」

ハヅキが建物内の部屋の戸を開けると……………。

「何でしょうか？これは……」

ソコには患者と医者の死体があつた。  
更に……………

タスケテクレ！

その死体が動き出した！

「なあ、これはゾンビだよな？」

ハヅキが若干引きつった顔で言う。

「ああ、多分な……」

「ええ、そうですね……」

多分俺達の考えは今、一つだろう。  
よし、

「逃げろぞ（ましよう）！！」「」

俺達はケロベロスもビックリなスピードで逃げ出した。  
すると、

オマエラモ！

ゾンビが病院の至る所から現れた。

オナジニシテヤル！

「ブリューナク！！」

アクレーシエはブリューナクの力を解放させる！



てな訳で俺達とゾンビ達の追いかけてここが始まった。  
と言っよりも始まってしまった……………。

S i d e O u t

## 第壹章閑話貳

S i d e 辰哉

ゾンビ、それは朝になれば陽が射し動きが鈍るものである。

しかし、

「まだ追って来るぞ……………!?!」

朝になれば追って来ないだろうとふんで、朝まで逃げ続けていた俺達は、徹夜で逃げ廻った。

だが、

コロシテヤル!!

ご覧の通り「大丈夫だ問題ない」とでも言いそうな具合に健在でございます。

「どうするんですか?このゾンビ共は……………」

1時間後

「アレは何だ？」

ゾンビ達から逃げる為に走っていると、禍々しいオーラを放つ血のように紅い片手剣が地面に突き刺さっていた。

ドクンッ！ドクンッ！

俺の身体が紅い剣に共鳴するかのように脈動する。  
その剣を手にとってみると、

「……………ノスフェラトウ」

意図せずに、知らない筈である剣の名前が口から溢れでた……………。

ズオオオオオオオツ！

血のように紅い剣……………ノスフェラトウから発せられたオーラが近くの風景を紅に塗り潰す。

「さあ、裁きを始めようか？」

俺は断罪者と呼ばれていた頃の口癖を思わず口にした。

コロシテヤル！

ゾンビ達は、俺に襲いか掛かろうとしたが……

ナゼウゴケナイ！

金縛りに遭ったように動けなくなった。

「判決は………死刑だ！」

ノスフェラトウに魔力を込め、ゾンビ達に降り下ろす。

ギアアアアアアッ！！

ゾンビは断末魔を上げて弾け飛んで行った。

Side Out

Sideアクレーシエ

汐留辰哉、彼が言ったのは……………。

アレは断罪者と呼ばれた男がよく口にしていた台詞だ。

それに、ゾンビ達に止めを刺す時に、彼の片目は赤く光っていた。

アレも断罪者と呼ばれていた男と一緒に……………。

一体、彼は何者なのでしょう？

S i d e O u t

とある研究施設

「サマエル様」

堕天使がサマエルを呼び止める。

「どうしたのかね？」

「報告致します。」

人体不死化計画の検体不44体と実験施設が何者かにより破壊された模様で此方からの通信が射絶されました」

「フム、構わん。アレの実験の成果は既に終わっている。報告はそれだけか？」

「はい、アザゼル様にも報告致しますか？」

「その必要はない。下がって良いぞ？」

「了解しました」

堕天使はその場から立ち去った。

「フフフフフフ……、これで、遂に逢えるよ……」

サマエルは身体に影を纏い、狂ったように笑い始めた。

## 第壹章陸話

S i d e 辰哉

俺はハヅキらと三手に別れてサマエルの居場所を探していた。  
ん？

突然現れた魔方陣から上級墮天使が出てきたようだ…

最近よくそれなりの存在と遭遇するなあ…

もしかして呪われてる？

「君が汐留辰哉さんですか？私はシエムハザです」

ホラ、来た！

「ああ、そうだが？」

「アザゼルからの伝言です。」「ああ、すまんすまん忘れてた。サマ

エルの居場所だが、シエムハザに魔方陣で転送してもらってくれだそうです…。ホントすいません、あんな総督で…」

シエムハザがすごい申し訳無さそうにしてるよ…

一体いつも何してんだらうか？

「お前も大変だなあ…」

「ハイ…」

あ、今遠い目してた…

「他の二人はどうするんだ？」

「見つけ次第強制転移させます」

「そうか…。それともう一つ」

まあ、アイツらは死なねえだろそう簡単には、

「俺は人間だが、墮天使の魔方陣で転送できるのか？」

転送できないから走りなさいとか嫌だぜ…？

「心配無用です。魔力と使用者の容認があれば転送可能ですよ？」

「んじゃあ、頼む」

「では、処分をお願いします」

てな訳で着いたんだが…

「覚悟！」

何でいきなり囲まれてんのね…

更にさっきまで差してた日も消えて、影のように暗いし  
何かダルいし…

アザゼルめ！

次遭ったときは肉体言語や高町式交渉術を交えた  
破那死亜射をしてやるっ…  
クツクツクツクツ！

「我々を無視する気か！人間風情が！！！」

ああ、面倒くせえ…

「黙れ、その人間風情に消されるモブキャラ共が…」

この前引っこ抜いた剣でも遣うかな？

「ノスフェラトウ…」

そう呟くと虚空に亀裂が入り、次元の狭間がギギギッ！と音を立て開きノスフェラトウが出現する

「さあ、ノスフェラトウ…血を吞ませてやる…」

「何なんだあれは！？空間が裂けるだど！？」

俺を囲っていた奴らの内の一人がそう言った刹那  
ノスフェラトウから発せられる紅いオーラが影のように暗い周囲を  
染め上げる。

俺は瞬時に奴らを切り刻み、断末魔さえも上げさせず消滅させた。

さて、サマエルは何処に居るんだろうかねえ？

Side Out

Side In  
≡HΛφe≡HΛ

んむ？

アレはシエムハザの術式の反応か…

まあ、食い止められるとは思わんが下級の奴らを配置しておくか…

「諸君らよ、第二研究室にて侵入者に備えよ！繰り返す……………」

それにしても、この神器とやらは良い物だ…

確か『闇夜の大盾』と云ったか？

改造しすぎて原型を留めていないが、影で固有結界を張れるのは驚異的だろう…

「我が見ゆる全てを闇に染めよ…」

俺が詠唱すると周囲の空間が黒い霧のような闇に包まれ、暗き闇に染まった…

外から差していた日の光が反転したかのように闇を放った…

今しがた俺の居るこの研究施設は、俺の産み出した影に包まれた…

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

## 第壹章 漆話

Side 葉月

うーん、此処も違うなあ…

俺は今サマエルの居場所を捜しているんだが…

何処に居るんだよ！

てか、俺は見たこと無いから誰かわかんねえんだよなあ…

「オイ、貴様！

ここから先は立ち入り禁止だ、今すぐ出ていかぬなら死んで戴く！」

75

なんか、目の前に墮天使が立ってんなあ？

ああ？俺の邪魔しようってのかあ？

じゃあ、死んで貰うか？

「お断りだ雑魚が」

俺は鎖を放ち心臓部を突き飛ばした

「キ…サマ」ガクッ

お、消滅したか？

今日は墮天使とエンカウントしまくるなあ…  
もしかしてサマエルの支配地か？

ああ、面倒くせえ…

ん？「第3実験ホール」かあ…  
こりゃあ何かの研究所か？随分デケエなあ…

ギヤヤアアアオオオ！

「うっせえ！死ねゴラ！」

何か顔が3つある機械の埋め込まれた犬が出てきやがった…  
名前はケルベロスだったか？  
改造されてるみたいだな…

取敢えず殺しとくかあ？

ガキンツ！

「ありゃ？」

俺は鎖を放つがケルベロスは前足に埋め込まれた巨大な鉤爪で弾いてきた…

そして、

ザシユッ！

その鉤爪で今度は俺を切り裂いた…

「な、何だつてんだよ…」

ヤベエ、身体思いつきり引き裂かれやがった…  
油断したなあ…コレは死んだか？

ああ意識が遠退いて行きやがる……

S i d e O u t

突然、葉月の目が開かれ紅く輝る…

『フム、やっとこの身体を動かせるな…。全く、挺摺らせおって…  
所詮は、鎖で我を現世に縛り憑ける為の代替品…

とは謂えども、今はコレでも良いだろう…』

倒れていり葉月の周りから彼のモノではない声が響く…

バサッ

葉月の背から、吸血鬼の蝙蝠のような翼ではない  
禍々しい紅を帯びた全てを染め上げるかのような深い漆黒の12枚  
の翼が現れる…

『叛逆せし其の罪を縛る鎖よ、万物を縛れ…』

“彼”の周囲から無数鎖が解き放たれケルベロスを縛り上げる。  
身体中から埋め込まれた武器を出して抵抗するが動けない…

『故に、我は叛逆（裏切）らん。総てを…』

“彼”の翼に闇と光が帯びていく。  
そして、

『其の罪、その罪、その軀に刻み穿たん…』

翼から闇と光の刃と為って羽が打ち出されていき、  
拘束された改造ケルベロスに一斉に突き刺さっていく。

ギヤ… 『貴様に発言を赦した憶えは無い…』

それを最期にケルベロスは動かなくなった。

『フム？どつちやら代替品が目覚めるようだな……』

“彼”がそう言つと展開されていた翼が消える

そして、

「クツ… ありや？俺死んでない？」

葉月が目を覚まし辺りを見回すと、動かなくなった改造ケルベロス  
が倒れていた。

「ありやりや？何か死んでるがまあ良いや…俺が生きてるっばいし

「！」

『諸君らよ、第二研究室にて侵入者に備えよ！繰り返す………』

「この声はサマエルとかいう奴の声か？聞いたことはあるなあ……」

「まあ良いや。取敢えず中心部に向かうか……」

葉月は改造ケルベロスが守護していた実験ホールを後にした

第壹章 捌話（前書き）

m 【闇と光を裁く者 原作編】の方もよろしくお願いします m（

## 第壹章 捌話

S i d e ア ク レ ー シ エ

私は今、2人と別れて行動しているのですが…

サマエルは研究施設を根城にしていると聞きますが何処に居るんでしょうか？

「その悪魔！今から消滅してくれる！！」

これは墮天使ですねえ？それも中級位の…  
鎌をかけて見ますかねえ？

「おやおや？自分よりも上位の存在に名乗りもしないとは…  
主の程度が知れますねえ？」

「貴様、サマエル様を愚弄する気か！」

どうやら成功のようですねえ…

「此処がサマエルの根城で間違い無いようですねえ？  
貴方にはもう用は有りません。大人しく消えて頂きたいのですが？」

「貴様ア！？」

彼は光を槍にして戦うようですねえ？やはり所詮は下級存在。  
全く芸のない…

「出でよ、ブリューナク！」

『Divid』

音声と共に私が相手どっている墮天使の力が半減され私に還元される。

……大した魔力は来ていませんねえ？所詮その程度ですか。

「力が出ないだ！？貴様、何をした！」

フム、力の減少に気付ける程度の知能は有るようですねえ？

「おやおや、聞けば相手が手の内を晒すと思っ  
ているのですか？や  
はり、墮天使などたかが知れていますねえ？」

私は相手から奪った魔力をブリー  
ナーに籠める。

「さて、死んで戴きましょ  
うか？」

ドスッ！という音を立てて、私はブリー  
ナーで墮天使を貫いた。  
シューウウウウ……という音と共に、墮天使は断末魔すら上げぬまま  
消滅した。

ここは、研究施設の入り口ですかねえ？

『諸君らよ、第二研究室にて侵入者に備えよ！繰り返す………』

これはサマエルの声………ですかねえ………？

どうやら汐留辰哉、片桐葉月のどちらかが、先にここにたどり着いたようですねえ？

「ここから立ち去れ、人と悪魔の子よ………我はカマエル」

カマエルですと………！？

奴は神から与えられた律法をユダヤに持ち帰ろうとした預言者モーゼを引き留めようとし、滅ぼされたと語られていたはずだ！  
更に墮天している………。

「何故貴方が生きていますのです!？」

「何、生き残った我がモーゼをピスガの頂ネボで殺し墮天したからだ………」

まさか、消滅したとされていた能天使の長と相對する事になるとは

………。

「ですが貴方は人間一人に殺されかけた天使、所詮その程度でしょう……」

「我也見くびられたモノだな。我は神の力とまで呼ばれたのだがなあ？ハア！」

カマエルは巨大な両翼を此方に向けて、突撃を仕掛けて来る。  
……ッ！速すぎますねえ……。

「ブリューナク！」

私はブリューナクを虚空から呼び出す。

「ホオ、太陽神の槍の贗作か……。だが甘いわ！」

バシユッ！！

「グアアアッ！」



まいりましたねえ…………。

まあ、良いでしょう。奴の悲鳴が聞けたのですから。

「死ね！カマエル！！」

私はフラガラッハと、ほぼ同時にクラウ・ソラスをカマエルに投擲する。

そのままフラガラッハとクラウ・ソラスは縦横無尽に動き回り、カマエルの身体中をズタズタに切り刻む。

「止めを刺して差し上げましょう！出でよゲイ・ボルグ！！」

私はゲイ・ボルグを更に顕現させる。

「さあ、死になさい！！」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！

凄まじい爆音と共に、カマエルは跡形もなく消え去った。

その跡には私が投擲したブリューナク、クラウ・ソラス、フラガラッハ、ゲイ・ボルグが突き刺さっていた。

「やれやれ、久し振りにキレてしまいましたねえ……。まあ、良  
いでしょう、先に進みますかねえ？」

私は武器を虚空に飛ばし、その場を跡にした。

S i d e O u t

**第七章 捌話（後書き）**

次は辰哉サイドです

## 第1章 玖話（前書き）

すいません。結構間が空きました・・・。

## 第壹章玖話

Side サマエル

侵入者の反応が2つ増えたか……。このままだと個々に此処にたどり着くのも時間の問題か？

……別に駄洒落では無いぞ？

まあ、それはそれとして信用ならねえが、アイツを使うとするか……。

「組織のエージェントとやら、人間の方の侵入者を足止めしてくれんか？」

「……………御意」

黒い仮面を着けた男は、肯定の意を表すと姿を消した……………。

「霸の力か……………」

S i d e  
辰哉

何か緊急警報出てんだけど……。  
侵入者って確実に俺だろ！何か転移した瞬間襲われるし。……もし  
かして行動が読まれているのか？

「侵入者だ！引っ捕らえる！！」

ほら、来た……。

「お断り、だッ！」

俺は命令を下したりリーダー格であろう堕天使との間合いを一気に詰め、叩き切る。

「さて、次はお前らだぜ？」

………こつは言ったが流石に数が多いなあ………。  
余り気は進まないが仕方がない、アレを遣うか。

俺はノスフェラトウをしまい、懐からナイフを取り出して、左の手首を切る。

俗に言うリストカットって奴だ。

「痛っ………」

動脈は切ってはいないが、痛いものは痛い。

俺は血が滴る左腕を堕天使共の居る方向に薙ぐ。血飛沫が堕天使共の身体や研究施設に飛ぶ。

「貴様、気でも狂ったか？」

「弾け飛べ！」

Explosion !

俺がパチツと指を鳴らすのと同時に、血飛沫が飛んだ場所が光をあげて爆発する。

………今ので大方片付いたか？

「貴様あああ！？」

生き残りの墮天使が光の槍を携えて接近してくる。  
俺は接近する墮天使に向けて左腕を放つ。

「うわあっ！？や…やめてくれ…！！」

奴は悲鳴をあげる。

何故？それは俺の放った左腕から飛び散った血飛沫が墮天使の身体に降りかかったからだ。

パチッ！

E x p l o s i o n !

指を鳴らす音が鳴ると同時に墮天使の身体は爆炎と共に消滅した。

「……………」

どうやら黒い仮面を着けた男が、こちらの行動を傍観していたようだ。

「何か用か？……………出来れば消えてほしいんだが？」

しかも、覇のオーラを感じる。まさか……………！？

「……………手合わせ願う！」

『Welsh Dragon Balance Breaker!  
!!!!!!!!!!!!!!』

奴は赤い鎧、『赤龍帝の鎧』を纏う。

ヤベエ！？神威具かよ！しかも二天龍の片割れ！

「ノスフェラトウ！」

愛剣を右腕に呼び戻し、

「『血よ、我が剣に宿れ！』」

C l u d e   i n   m y   b l o o d   o f   s w o r d .

左の手首から滴っている血を宿らせる。

「……………」

『Boost!』

仮面の男の力が跳ね上がり倍増する。速く潰さないともっと厄介になるか……………。

『Blade!』

「……………さあ、掛かってこい!断罪者!」

奴の籠手から剣が伸びる。更に、

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!』

『Transfer!』

倍増された魔力が、籠手から伸びる剣に譲渡される。

「お前みたいなのが一番殺りづらいんだよッ！」

俺はノスフェラトウを構え、間合いに入り横薙ぎに一閃する

ギイイイインッ！

しかし、奴の剣に防がれてしまった。  
その上、

ズシュッ！

俺の身体に剣が深く突き刺さり、血があちこちに飛び散る。

………  
クククク、引っ掛かったな？

パチッ！

Explosion！

血の着いたモノ全てが弾け飛ぶ。

「……………甘い！」

『JET！』

ツッ！？アレが効いてねえのかよ……………。  
奴の赤い鎧から赤い両翼が飛び出し、そのまま音声と共に加速し、俺に突撃する。  
だが、突如攻撃が停止する。

「……………クッ！？私も甘かったようだ」

爆炎が止むと、鎧のあちこちがボロボロになっている奴の姿が見えた。

「……………此処で死ぬまで闘うのも良いが、君は違うのだろうか？断罪者」

「ああ、そつだな」

俺は奴の言葉を肯定する。

このまま殺り遭えば確実に死ぬまで続くだろう……………。

「……………私の任務は足止めだ。充分にその任を果たしただろう。では、また会おうぞ、断罪者！」

奴は転移用魔方陣でこの場から去っていった。

……………奴とは、また会うことになりそうだ。

まあ、今は先に進むのが先決だな……………。

待っている、サマエル。あの時の借りは返してやるよ！

## 第壹章拾話

Side辰哉

にしても痛てえなあ……………。

赤龍帝の放った刃が俺の腹部に深々と突き刺さった。まあ、わざとではあったが出血の量がヤベエ……。明らかに致死量だ。コレだけはジジイに感謝しなくちゃなあ……………。

「おい辰哉！つて、また血塗れかよ……………。何か変なの現れたか？」

ハヅキが別の通路からやってくる。  
ああ、現れたとも。とっておきのがな……………。

「赤龍帝だ……………」

「マジかよ……………。良く生きてんなあ？」

全くだ……………。俺は何でこんなのと闘つ羽目になったんだよ……………。

「フウ、そんな血塗れなお前にプレゼントだ」

ハヅキは懐から小瓶を取り出し、投げってくる。……………これは…フェニックスの涙か？何で俺に……………ああ、明らかに重傷だったな……………。

「ありがとよ……………」

振りかけると腹部の傷が丸々消え去った。つーか、この薬どんな仕組みなんだ……………？傷が跡形もないぞ？

「んじゃあ、行くか？」

「ああ」

俺達はサマエルの待つ研究施設の最深部へと向かった。

S i d e O u t

S i d e ア ク レ ー シ エ

「どつやら、コピーでは相手にならないかな？」

声が聞こえる方向に視線を向けると小柄な少女が此方を見ていた。

……ッ！？何者でしょうか？気配が察知出来なかった。

「そう身構えなくても良いよ？僕は闘わないから」

いや、コイツには何かありますねえ……。何か強力な力が。

「僕の神器は『魔獣創造』。名前くらいは知ってるよね？」

「『魔獣創造』ですと!？」

「そう、さっきのカマエルも僕が造り出したんだよ。そして、此処には現赤龍帝もいる。他にも僕の造り出したフェンリルの牙と同じレベルの爪を持つケロベロスもいる。前に進むのは止めなよ」

「その程度でノコノコ帰るようなら、敵の本拠地になんて向かいませんよ。それならその神器を戴くのみです!」

私はブリューナクを構える。が、それと同時に魔方陣が出現する。

「……………撤退だ」

中から、赤い鎧を纏う男が現れた。彼が現赤龍帝ですか……………。

「別にこの程度なら倒せるよ?」

「……………此処で手の内をさらす必要はあるまい」

「そうだね。じゃあ帰ろうか?」

……舐められたものですねえ。でも、今この状況では勝てないのもまた事実ですかね……。

「じゃあ、また会おうね。悪魔さん」

そう言い残し、新たに出現した魔方陣に2人は包まれる。

個人的には会いたくはないのですが……。

それはそれとして、今はサマエルの討伐ですねえ……。  
この施設内のどこにいるんでしょうか？まあ、あちこち探して見ますかねえ……。

S i d e O u t

## 第壹章拾話（後書き）

次はサマエル戦になると思います。  
現赤龍帝と『魔獣創造』使いは後に組織共々でできます

## 第壹章拾壹話

Side サマエル

奴の反応と2つの反応をこの周辺でキャッチした。奴と一人は一緒に、もう一人は単独か……………。

俺としては断罪者と闘いたいんだがなあ？

「侵入者は三人で内一人は単独行動中だ。総員であたれ！絶対に通すな！」

まあ、止められるとは微塵も思っていないかな？ 精々、時間稼ぎにはなれよ？

さて、そろそろコッチも完成か……………。

これで、遂に……………

S i d e  
辰哉

これは……………死体か？

目の前にヒトの死体が積み上げられている。  
身体の一部が欠損しているモノなどは生易しい。最早、原型を留めていないモノが大半を占めている。人で在ったことが解らない程に……………。

他にも、ホルマリンに満たされたケースに使っていいモノもある。

もしかして、あの動死体もこの実験の結果の、ヒトの成れの果てだったのかも知れない…………。

だが、この光景を目にしても、最早何も思わない。

だって、俺が築いてきた死体の山は、裁いてきた人々の数はこんなモノじゃないからだ。

「どうやら、此処がサマエルの研究室のようだな…………。ツツ!?  
んだ、あの数は…………! 五百は下回らねえぞ!」

俺とハツキの目の前に墮天使の大群が現れる。それも、中級から上級墮天使を中心とした…………。コイツは不味い…………。

「トキヤ! おめえはサマエルと闘ってこい!」

ハツキは鎖を放ち俺の周りに居る墮天使を薙ぎ払っていく。

「流石にお前でも、それは無理だ!」

ハヅキは強い……多分俺よりも。だが、この数相手では話が別だ。

「おいおい、俺を誰だと思ってる？ホラ、さっさと行け！」

「分かった……。絶対に死ぬなよ！」

「フツ、当然だ！」

俺はノスフェラトウを構え押し寄せる軍勢に一撃離脱を試みる。

……が、

押し寄せる墮天使の軍勢が閃光に包まれ消える。

「おやおや？やっと合流出来たようですねえ？」

そこには、ブリューナクと見慣れぬ槍を携えて、墮天使を屠るアクレーシエの姿があった。

「やれやれ、サマエルは貴方に譲りましようかね？………さあ、行きなさい！汐留辰哉」

「ああ、行ってくる！」

俺は、目の前にいた墮天使を切り伏せながらサマエルが居るであろう研究室に向かった。

「どうやら、行ったようだな？」

「ええ、そのようですね？」

ハヅキは鎖に縛られた紅い剣を手元に顕現させる。

「先にくたばんなよ？」

「貴方こそ！」

「「さあ、相手になって貰うぜ（貰いましょうか）？」」「

此処がサマエルの研究室……………。

アレは……………ヒトか？

培養カプセルのようなモノの中に全裸の女が入っていた。

「美しかろう？それが神が最初に創造した女……………リリスだ」

突然声が聞こえ、振り向くとそこにはサマエルが立っていた。

「俺は、悪魔との闘いに破れ死にかけていた。その時、彼女……………リリスが私を助けた。それ以来、私は彼女に惹かれるようになった。ある日、リリスは神に与えられた使命を捨て、アダムの元を去った。そして……………神はリリスを殺した！」

俺は与えられていた力を使い、彼女の身体のみをこの世界に括りつけた。そして神は俺を墮天させた」

奴は、影を纏いながら続ける。

「リリスを蘇らせることは、既存のどの魔術でも不可能だった。だから、俺は自ら編み出すことにした。

そして、その為の実験は今しがた終わった。だが、その術式を発動するにはそれ相応のヒトの死体を贄に捧げられない」

奴の身体から放たれるオーラが増大する。

奴の目的が読めてきた……。

「断罪者である君や英雄のようなだ！私は旧魔王派の一部の悪魔を利用して君を誘き寄せた。吸血鬼どもの施設を襲撃したのも、君の力を測る為だ。アザゼルが君を此方に派遣してきたのは嬉しい誤算だったよ」

要するに、アンセントっかいう悪魔との戦闘といい、施設の襲撃はコイツが裏で仕組んでいたって訳か……。

「俺を殺して贄にしようってかとか？」

「そういう事だ。さて、大人しくは死んでくれそうにもないからな、俺が直々に手を下してやろう！」

奴の周囲の影が奴の身体中を包み込む。  
そして……………。

「……………禁手化！！」

閃光が奴を中心に溢れだし、それが止むと影で形成された黒く禍々しい鎧を奴が纏っていた……………。

S i d e O u t

## 第壹章拾貳話

Side 辰哉

「我が見ゆる全てを闇に染めよ！」

禁手………しかも、アレは亜種か。観た感じは鎧のようだが……。  
そしてこの結界は………。  
奴の詠唱と共に周囲の空間が黒い霧のような闇に包まれ、暗き闇に染まっていた。

「喰らいな！」

俺はノスフェラトウでサマエルを斬りつける。奴は左腕でそれを防ぐ。だが、ノスフェラトウは鎧の籠手の部分を切り裂く。  
が、

「甘いな！」

切り裂いた部分の鎧に周囲の影が纏わりつき、再び鎧を形成する。

「『影の鎧』………コレはこの前の神器を改造したものの禁手でな、

影があれば損傷部分が再形成されるのだよ」

更に、左腕に纏わりついていた影が膨れ上がり、籠手を肥大化させる。

ブオオオオオン！

肥大化した籠手の先端からバスターソード並の光刃剣が現れる。

「早々に死んで貰おうか！」

奴は左腕を此方に振りかざす。

「嫌だね！」

俺は研究室の床を蹴り上げ跳躍する。  
物凄い風切り音と共に、左腕がさっきまで立っていた場所に振り下ろされる。

………当たってたらお陀仏だったな。

「オメエが死ねよ、サマエル！」

降下と共にノスフェラトウで斬りかかるが、

「無駄だ！」

奴は右腕に影を纏わせて、左腕と同じがモノが形成される。そして、振りかざしたノスフェラトウは弾かれる。ノスフェラトウでは、分が悪すぎる。ならば…………。

俺は懐からナイフを取り出し左手首を切りつける。

「『血よ我が衣に宿れ！』」

C l u d e   i n   m y   b l o o d   o f   c o a t .

俺の神器に血を宿らせた。コートの紋章の部分が紅く輝いている。

「『血よ我が剣に宿れ！』」

C l u d e   i n   m y   b l o o d   o f   s w o r d .

更に詠唱ん続け、ノスフェラトウにも血を宿す。

「その程度の強化で勝てると思うてか？」

奴は両腕の光刃剣で、斬りかかってくる。

ギイン！ギイン！

剣と剣がぶつかりあい、常人には見えないスピードで俺とサマエルは斬り合う。剣の波動と得物がぶつかる音のみが闇に包まれたこの場に新たに現れる。

「さあ、これで終わりだ！」

剣と剣のぶつかり合う一瞬に、サマエルの左腕から放たれている光刃剣が更に大きくなり、ノスフェラトウは弾かれ、そのまま腹を抉られる。そして、辺りに血が飛び散った。

………痛てえなんてもんじゃねえ……意識が飛びそうだ。だが、これ………！

「………終わんのはオメエであつ！」

パチッ！

EXPLOSION！

俺が指を鳴らすと同時に辺り周辺の空間が弾け飛んだ………。

SideOut

## 第壹章拾参話

Side サマエル 回想

「ゲホツ！……………これは、もう持たないか……………」

俺は悪魔との闘いに敗れ消滅仕掛けていた。

「死を司る天使の俺が、死を恐れるとは……………。皮肉なものだ」

俺の身体の半分は光に包まれ、既に消滅仕掛けていた。

「貴方は生きたい？それとも死にたい？」

俺の目の前には、神が最初に創造した女      リリスが笑みを浮かべ、  
立っていた。彼女は美しかった。

「俺は……………まだ死ぬわけには……………」

会話を交わす最中にも身体は消えていき俺を光が蝕んでいく。

「じゃあ、助けてあげる」

彼女が俺に触れると身体の消滅が止まる。最も、既に消滅した場所はそのままであったが……。

「有り……難う。君は？」

「私は、リリース。貴方は？」

「俺はサマエルだ。何かお礼に出来ることはないか？出来る範囲なら何とかしよう」

「私はエデンの外を見たいの」

「分かった。好きなところに連れて行こう」

俺はリリースをエデンの外の世界に連れていった。色々な所に……。

だが、コレが駄目だったのだ……………。

ある日、リリスはもっと、外の世界を旅したいと、アダムの元を去った。

コレが神が与えたりリスの使命を棄てることと同じだったのだ。

俺は、当然ソレに反対したが神の考えは変わらず死刑が執行された……………。

俺は彼女を蘇らせる為、死を司る力やあらゆる禁呪を用いて彼女の身体をこの世界に縛り付けた。  
敵対していた魔王の力まで借りて……………。

神はそんな事を許す筈が無い。  
当然俺は墮天した。

S i d e 辰哉

殺ったか……？コツチもそろそろヤバイんだけどなあ……。

「……………。いやあ、危ない危ない。危うく消滅するところだった」

爆炎の中から片腕が焼失したサマエルが立っていた。焼失した片腕の付け根に断線したコードなどが有ることから、ソレが義手であることは明白だった。要するに、サマエルに決定打ヲ与えられなかったってことだ。

「さあ、死ぬが良い！」

闘つのはおろか、歩くことすら儘ならねえ。もう打つ手が有るにしてる身体が動かんことには話にならないな……………。

奴が無事である方の腕の光波剣を振りかざす

その瞬間、

『アハハハハハハハハハハ！』

最早、人間の声でない様な声を培養カプセルのようなモノに入っている全裸の女　　リリスが発する。

「リ……リス……？　どうしたと言うのだ？　俺の計算は完璧だった筈だ！？」

リリスが培養カプセルから出ると、その身体から禍々しいオーラが放たれ、メキメキッ！という音と共に、背中から形容し難い程に禍々しい翼が、背中を突き破って這え出た。

「人が人を創ることも蘇らせることも出来ない。ソレは無論、天使だろうが悪魔だろうが出来ねえ……………」

「そんな…そんな筈は！！」

『ゴクロウサマ。リヨウサレテイルダケトモシラズニ！アナタハモウイラナイワ。サヨウナラ、サマエル！』

リリスは身体中を突き破って現れた触手でサマエルを貫いていく。

「クツ、ゲホツ……………！と……………止めてくれ……………リリスを……………俺の力を断罪者……………汐留辰哉！お前に託す！」

奴はそう言い残すと消滅した。

「コレがサマエル、お前の業の報いだ……………。だが、コイツだけは絶対に裁く！」

『Recover!』

俺の傷が修復される。コレは……………神器の力か？

更に、周囲の影が俺を包む。

よし、これなら！

「『血よ、劔に宿れ！』」

C l u d e i n m y b l o o d o f s w o r d .

俺はノスフェラトウに血を宿らせる。その上、

「『劔よ、我が影を纏え』……………」

W r a p p m y s h a d o w o f s w o r d .

影を纏わせる。

……………確かに託されたぞ、サマエル！

「さあ、裁きを始めようかー！」

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

第壹章拾四話（前書き）

遅くなりました。

## 第壹章拾四話

Side 辰哉

「さあ、裁きを始めようか!！」

「影よ!！」

俺の周囲を影が包む。

身体が軽い……………!これなら……………

『シネエエエエエ!』

リリースは身体から這え出た、幾重にも連なった触手を放つ……………。

バシユツ!という音と共に血飛沫が辺りを紅く染める……………。  
が、ソレは俺の血ではない。

血飛沫が上がる。

しかし、ソレは俺のではない。俺は触手に一瞬で接近し、ノスフェラトウでそれらを一閃していた。その為、リリスの触手が俺を貫くことは無かった。

切れ味も増しているな……………。

『ウソヨ！コンナ……………イチゲキデ！？』

「さあ、終わりにしようか？」

ノスフェラトウに魔力を込め、リリスに斬りかかる。

『フフフフフ！！カカッタワネ！』

奴は身体に残っていた触手を全て俺が居る方向に放つ。

「掛かったのはお前だ……………！」

俺はノスフェラトウを振るのを止め、後ろに数歩下がる。

辺りにはサマエルと闘った時の血が未だに飛び散っている。  
……あとは判るだろう？

パチッ！

Explosion！

『ギアアアアアアアア！！』

触手をノスフェラトウの斬撃の防御に使った為に、手薄になった身体に爆発が直撃する。

「……………コレで終いだ。リリース！」

『マダヨ、マダオワラナイワ……………！アナタモマキゾエニ！！』

奴の血塗れの身体を中心として、円形の光が拡がっていく。

……魔方阵！？まさか！

『アナタモミチツレ。アハハハハハハハ……！』

間違いない。これは自爆用の魔方阵だ……。

《聴こえているか？汐留辰哉……》

俺の頭の中に声が響く。

な！？……サマエルか？

《神器に残った俺の残留思念のようだな……。暫くすれば俺は完全に消滅するだろう》

そうか……。

《その前に君にコレを渡したい……………》

俺を黒い光が包む。

コレは……………？

《俺の司っていた“死ノ力”だ。最上位の天使は、完全消滅の前に力を誰かに譲渡するものでな……………》

俺はこの力を裁きに……………いや、人殺し遣うぞ？

《構わん。君の好きにするのだな……………。おっと、もう時間のようだな？では、無の中で待っているよ……………。さらばだ！》

じゃあな……………サマエル。

ソレを最期にサマエルの声は聞こえなくなった。

「早速、遣うとするか！」

『“Death” avillity is taken!』

俺の纏っている《裁きの黒衣》をドス黒い光が包む。

「お前への判決を言い渡す！……………死刑だ！」

俺黒い光でリリスを挟むように二本の柱を形成させる。

『ソナナ！アトゴビョウデ！』

「知ったことか……………」

二本の光の柱がリリスを呑み込んで行く。

「なあ、人は死んだら冥界か天界に行くらしいが、ソレよりも高位の存在がどうなるかは知ってるよなあ？」

『ワタシハ、ワタシハ……………!』

「待っているのは

…………… “無”だ。沈め……………」

俺が言い終えるのと同時に、リリースは消滅した。

これで終わりか……………。

S i d e O u t

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1000u/>

---

闇と光を裁く者

2011年10月24日02時03分発行